

北関東の山無し県 茨城のクライマー集団の会報

R&V 56.57号

2005年1～6月



ACC-J 茨城

ザイル考

登山用ロープをドイツ語ではザイルと呼び、我々も長年ザイルと呼んできました。昔は 11m×40m を使用していましたが、現在では細分化されアルパインでは 9mm×50m を使用し、沢登りでは 8mm×30m を使用し、フリークライミングでは 10.5mm×45m を使用しています。ザイルはお互いの安全確保の為に使用しますが、それ以上に精神的な繋がりを感じる事があります。岩壁を登っていてお互いの姿が見えなくても、ザイルの流れでパートナーの動きが推測でき、困難な部分にアタックしているのがザイルの動きを通して推測出来る事があります。また、ザイルなしで登っていて躊躇するような場所でもザイルを結んだだけで精神的に落ち着き安心して登る事が出来ます。困難な場所に立ち向かって一人ではなく、このザイルの末端には信頼できるパートナーがいると思うと、強い意志が沸いてきます。このようにザイルには不思議な力を感じる事があります。ザイルには様々な歴史があります。昔は麻ザイルを使用し、次にナイロンザイルが登場したときには小説『氷壁』のモデルにもなった冬の前穂高岳東壁でのザイル切断事件があり、谷川岳一ノ倉沢衝立岩での遭難者収容の為に自衛隊によるザイル銃撃事件があると、山に登らない方もザイルの名前だけは知っていると思います。山でザイルを使用する為にはザイルの結び方を初めとして、カラビナの使い方、シュリングの使い方、安全確保の方法等を覚える必要があり、我々の山岳会では初心者にはザイルの使い方の初歩から教えて訓練しています。しかし、ザイルを十分に使いこなす為には信頼できるザイルパートナーが必要です。ザイルパートナーは一朝一夕で出来るものではなく、何回か山行を重ねてお互いの技量を見極めてザイルパートナーとして信頼できる山仲間が出来ると信じています。ザイルはパートナー同士のお互いの体を結びますが、互いの心もザイルで結び合っているような気がするのはいずれでしょうか？一般社会でも困難な事を乗り切る時に、パートナーと信頼と言う見えないザイルで結びあって乗り切る事が可能と思います。

(木村 記)

《目次》

2005 年冬・春号 1 月～6 月 ACCJ・茨城

巻頭言ーザイル考ー	．．． 1
集会報告	．．． 3
山行報告	．．． 4
北ア 霞沢岳	．．． 5
八ヶ岳 中山尾根	．．． 7
八ヶ岳 権現岳東稜	．．． 9
会津 三岩岳	．．． 11
コラムーケ岳についてー	．．． 12
雪上訓練	．．． 13
岩木山～八甲田山～秋田駒ヶ岳～鳥海山～月山	．．． 15
未丈ヶ岳	．．． 21
尾瀬 燧ヶ岳	．．． 24
硫黄沢	．．． 25
西表島 ー2 ヶ月間サバイバル生活ー	．．． 27
友好山岳団体の月報・会報・その他	．．． 40
編集後記	．．． 48

* 表紙ー大鳥岳から毛猛山を望む (Photo by Sakata)

集会報告

(於：ガスト土浦店)

【1月】

1月5日：本図、木村、菊地、吉田、笹平、渡辺、松田、木南、正木、坂田

1月19日：本図、木村、菊地、吉田、笹平、渡辺、松田、坂田、木南、諸井

【2月】

2月2日：2/2：本図、木村、菊地、笹平、吉田、渡辺、松田、正木

2月16日：本図、木村、菊地、正木、坂田、鯉河、笹平、正木

【3月】

3月2日：本図、木村、菊地、吉田、笹平、坂田、渡辺、諸井

3月16日：本図、木村、菊地、渡辺、松田、木南、正木、松井

3月30日：本図、木村、菊地、吉田、渡辺、木南、正木

【4月】

4月13日：本図、木村、菊地、吉田、渡辺、木南、坂田、正木

4月27日：本図、木村、菊地、吉田、渡辺、木南、坂田

【5月】

5月11日：木村、菊地、吉田、渡辺、木南、松田

5月25日：本図、菊地、笹平、吉田、渡辺、坂田、正木

【6月】

6月8日：本図、木村、菊地、坂田、松田、木南、吉田、渡辺

6月22日：本図、菊地、吉田、鯉河、渡辺、笹平、正木、木村

山行報告

(2005 年 1 月～6 月)

【1 月】

12月30～1月4日	北ア 霞沢岳	笹平、名雪
1月14～15日	八ヶ岳 中山尾根	笹平、坂田
1月25～27日	八ヶ岳 権現岳東稜	笹平、坂田

【3月】

3月8～9日	草津 芳ヶ平山スキー	笹平、坂田、正木
3月17～5月21日	西表島	笹平
3月27日	会津 三岩岳山スキー	木村、菊地、木南、正木、名雪

【4月】

4月9～10日	雪上訓練	本図、木村、菊地、吉田、渡辺、 正木、木南、松田、名雪、宮路
4月30～5月3日	劔岳 赤岩尾根	松田、他2名

【5月】

5月1～5日	岩木山～八甲田山～秋田駒ヶ岳～ 鳥海山～月山	木村、菊地、渡辺、吉田、木南、 名雪、他1名
5月11～13日	未丈ヶ岳	坂田
5月22日	尾瀬 燧ヶ岳	木村、渡辺、他2名

【6月】

6月15～16日	硫黄沢	笹平、坂田
6月20～22日	清津川 熊沢	笹平、名雪、仲川

霞沢岳

2004. 12.31～2005.1.3

パーティ 笹平孝、名雪博二(東京)

2003、平成15年12月31日に古い山の友、ザイルの友金沢清、通称アホの清を徳本峠ののぼりで失った、突然友に目の前で死なれたショックはまだ癒えていない、清のレリーフを作ってもらい、ゆかりの地にこれを設置したいと思い都合2回の山行をしたが、上高地という人の多く入るので有名な地域ゆえになかなか設置場所が見当たらない、良い岩が見つからない、この設置場所を見出すこと、と清の死で霞沢岳登山の目的が果たせなかった昨年のリベンジという2つが再び今年霞沢岳を目指した理由だろう。

笹平という最強のメンバーを得たことも大きな要因となった。

以下の日程にて山行は実質的には大積雪による鬼のようなラッセルに精も根も尽き果て、敗退となった。

日程

赤帽サンバーにて出発 31日1時ごろ沢渡到着大宴会後仮眠

12月31日 タクシーにて釜トンネル入り口まで、一上高地一明神(吹雪模様)一徳本峠(夕刻到着)

1月1日 ジャンクションピーク越えまで、偵察、寒気強しテント山小屋へ移動、快適

1月2日 4時45分出発、ヘッドランプでの行動を想定したが月明かりで行動できた、最低鞍部で先行パーティを吸収、ここから胸を越すラッセルでK1手前まで頑張るが力尽き敗退、小屋へ戻る

1月3日 徳本小屋一徳本峠入り口一明神一明神池一上高地一大正池(ビール)一釜トンネル出口一(タクシーにて)沢渡一(赤帽サンバーにて)松本、松本ジャスコにて車中大宴会一仮眠後3時45分帰途に着く

1月4日 4時30分頃つくば到着、7時20分ごろ埼玉県動物指導センター到着、8時30分から御用始、以上であるが終始清との最後の山行地にいることが、すこぶる心に安心感をもたらしたようだ。

下山して松本ジャスコにて盛大な宴会と仮眠は山で頑張った自分への褒美とし

て、今後も多少無理をしてでも実行して
行きたい事のひとつだ。

又1月4日早朝につくばに到着し家に
帰る時間が無いまま、公務員最後の4日
の御用始めに、山の格好のまま出席する、
という30歳代にまれに経験したことを

今回再度経験した、少々若返ったような
気がした。

（名雪 記）



八ヶ岳・中山尾根

2005. 1.14～15

パーティ 坂田英希、笹平孝

《近未来想像図》

幼少時代。そのころ想像した2005年の未来は、とても科学的な、まさに鉄腕アトムの世界。

ただ実際には、どうもピンとこないと言うのが正直なところではあった。

それと同様に今から30年後、つまり2035年などと言われたとしてもなんだか現実離れしていて遠い目をしてしまうばかり。

今ただ一つ、未来に関して想像でき得る現実的なコトといえば、これから向かう中山尾根。

終了点に着くころにはきっとへろへろなんだろうなあということ。坂田の近未来想像図はなんだかとってもへボかった。

《前代未聞》

下部岩壁の取り付けからいきなりはじめの一步が出ない。

早くも「へボ」の二文字が。取り付け一歩目敗退とは一体。我ながら前代未聞の由々しき事態。

ふうう。「ちかれたびい」開き直って思わずノスタルジーに浸る。

と、一筋の光明。半身をずらして凹角へと続くラインが見えた

ガシガシ登ってビレイポイントを一つ見送り、微妙な凹状フェースは左カチと右ブッシュ。

ボディテンションを生かしてなんとか通過。ロープ一杯使って上のダケカンバでビレイ。

そこから上はしばらく雪稜が続く

《意外》

上部岩壁は笹平さんリード。

今年初めのアイゼン登攀もずいぶん慣れてきて意外や意外、気分よくカツカツと前歯に乗り込む。

前歯一本での立ち込みなど、スタンスの引っかけりはクライミングシューズのそれと異なるがこれはこれで充分信頼に足る。

なおさらこの好天。痛快、爽快なクライミング。この調子でその後の小ハングを越えれば終了点。

いやはや快適な登攀にフト思い出す近未来想像図

おお、ヘロヘロじゃあないじゃん。こりやあ「インド人もびっくり」だ！

《未来想像図》

2035年

いよいよワシもこんな歳かあ。と孫に向かって若かりし頃の思い出話を繰り返す日々。

お茶の淹れ方にはなんだかこだわるジイさんにでもなっているのだろうか。

社会はどうなっているかなどとてつもなく考えつかなくて「とりあえず自動車は空を飛ぶのかあ」とありきたりの想像をしてみる。

「そんなのフツー過ぎでつまんねー。」と

我ながら思ってしまうものの、近未来もままならない坂田に未来想像などとても無理。

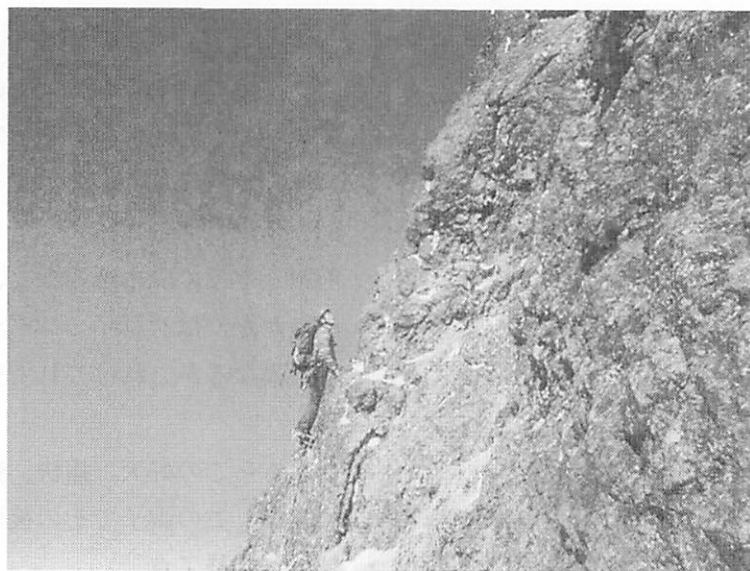
と、まあ、そういう難しいことはとりあえず後にして、いまは今宵の宴に想いを馳せる。

そうそう、坂田の近未来。

今宵は気分の良い登攀に乾杯。普段にもまして杯は進み酩酊するがよし。

これはマチガイない。

(坂田 記)



中山尾根。上部岩壁をリードする笹平

八ヶ岳・権現岳東稜

2005. 1.25～27

パーティ 笹平孝、坂田英希

ヤマというよりはココロの靄のような。そこへの悲願や憧れ、こだわりはなくとも執着はあったかと今にして思う。この緊張感というまでもない。昨年の敗退はその後を変えた。

鋭くスピード感溢れるナイフのような旭岳東稜に対峙して鈍くも力強く重座する権現岳東稜。そのバットレスの威容に懐かしさを感じる。

正直、まだまだ足りてはいない。とはいえ、様々な人生訓はいくらかでも今の自分に役立っているのを実感したりもするわけだ。

出合の小屋よりごく最近のトレースを踏んでいく。しかしそれは願いもむなしく旭岳東稜へと進む。さあ、ラッセルだ。ゴルジュまでは膝上ほど。そこから稜線にあがるルンゼの雪壁を一步一步スタンスを作りながらの登高。気の遠くなるこの作業で時に気分は萎え、何度撤退を言いかけたことか。

しかしこの山行が空振りに終わったとしても仕方がない。そんな覚悟はあった。そしてそれが自分をそこに留まらせた。

そこからはひたすらラッセルに終始する。それは腰まで、傾斜があれば胸まで。雪のステップをつくり一步一步地道に歩を進める。時にとてもやりきれないときもなくはないが、不思議と次第に当然のように思えてくる。

暮れてもラッセル。夜な夜な一杯やっては肴に喰り。

明けてもラッセル。青空への階段を造り続ける。

ラッセル職人への道はまず、笹平さんの動きをよーく観察する所から始まる。無駄に動かず効率的に進む、実に洗練された行動であることが良くわかる。

急な尾根を登りきれば細いリッジ。実に思い出深い場所である。

嫌な感覚はよぎったが難なく越え、バットレスの基部に着くころにそんな気分もとうに吹き飛んでいた。

基部からは笹平さんリードで左に回りこみカンテでビレイ。

そこから坂田が左のフェースを行くがピンが少なく10mほどのランナウト。一時は傾斜も緩まるが小ハングの乗り越しで

少し手間取る。雪のついた草と岩の緩傾斜で灌木を支点にビレイ解除。

いつしか降り始めた雪と風に壮大な風景は次第に掻き消されていく。

細いリッジを2ピッチほど行く。小ギャップのクライムダウンは少し嫌なところであったがあとはリッジを忠実にたどれば終了点。

シャリバテの体にようやくアンパンの御褒美。とはいえ、折からの強風。押し込むように流し込んだらそそくさと下山にかかる。

嫌な予感当たるもの。縦走路でラッセル、下山のツルネ東稜でもラッセル。

バテ気味の坂田は戦力とはならず、笹平さんが先行。全くもって笹平さんの身体

能力と判断力には及びもつかない。

出合小屋に着くころ、空にはオリオン座が瞬いていた。

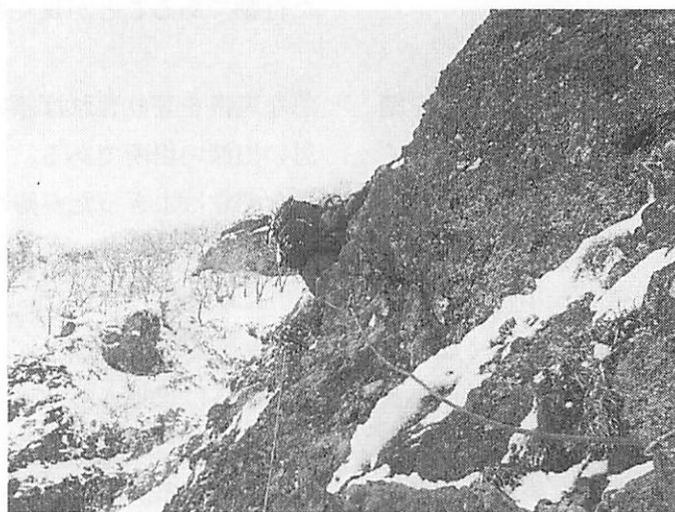
記憶の奥底に沈めたこともある。突然の悲劇に一筋の雫も頬を伝う事はなかった。それは心のどこかで安堵を感じていたから。

人に優しいココロの本質はどこにあるのだろうか。なんてことはない。自分が一番知っている。

ココロの靄に彷徨えば、思わぬ場面が蘇る。

白き嶺峰を振り返ったとき、澄み切った空気に息は白く、空は青く、なにより森は静寂を讃えていた。

(坂田 記)



さあここからが核心ピッチ。リードの坂田

三ツ岩岳山スキー

2005. 3.27

パーティ 木村 一、菊地光夫、木南真紀子、正木博美、名雪博二（東京）

積雪期の三岩岳は名雪さんにとって鬼門の一つである。5回トライしているが一度も頂上を踏んでいない相性の悪い山である。しかし、積雪期の三岩岳の良さを一度でも知ってしまうと、毎年でも登りたくなる山になってしまうから不思議な魅力をもった山である。

今回は名雪さんに三岩岳の頂上を踏ませるボランティア精神と、まだ踏破した事がない村界尾根に登り頂上から村界尾根を滑降する計画で、名雪、菊地、木南、正木、木村の5名で茨城を出発したが、昨晚から今日にかけて桜枝岐地方は吹雪いていたので、重い新雪のラッセルを覚悟していた。小豆温泉の駐車場で仮眠後、スキーにシールを貼り付けてスノーシェッドの手前から村界尾根に取付いた。予想通りに最初から重い深雪のラッセルが待ち受けていた。シール登高に不慣れな菊地はスキーを脱いで登ろうとしたが、スキーを脱ぐと腰上まで雪に埋没してしまうので再びスキーを履いて最後尾からゆっくり登ってきている。スノーボードの木南はスノーシューを履いての登高だが深雪時には有効な手段だ。

木村はテレマークスキーにシールを貼っ

ての登高だが、今回はラッセル用に新しいビンディングを装着して来た。この新しいビンディングはテレマーク用ビンディングなのだが、レバー操作で山スキーのビンディングと同様に可動部がつま先部にあるので、今までのテレマーク用ビンディングと比較するとラッセルが苦にならない。しかし、スキーを履いて膝上のラッセルなので先頭を交代しながら進むが遅々として進まない。この状態では三岩岳の頂上までは無理なのは明白だが、下りの滑降も思うように滑れず時間が掛かることが予想される。村界尾根の中間部の1500m地点で昼食を兼ねた大休止を採り、ここから滑降する事にした。三岩岳の頂上までは疎らに木の生えた真白い雪の斜面が続いており、いつかは是非滑って見たい所だ。いよいよ待望の滑降だが重い新雪に慣れていないメンバーは苦勞している様子だ。スノーボードの木南はついにボードを脱ぎ下りもスノーシューを履いて下っている。重い新雪を滑降する場合にはスピードを上げてスキーを雪面に浮かす技術が必要だがこれにはコツがある。この際だからここで教えちゃおう。最初から重い新雪のノートラッ

クの斜面に入っても斜度が少ないとスピードは上がらない。その場合には登高時の踏み固められたトレースに入り、ある程度スピードを上げてからノートラックの斜面に入ればスキーを雪面に浮かす事が可能になってくる。そして、多少後傾気味でスキーを雪面に浮かしてから浅いターンを繰り返すと重い新雪でも滑降が

可能になる。様々な雪質を経験する事、特に悪雪を数多く経験する事が上手になる近道と思う。

今回も名雪さんは三岩岳の頂きに立つことが叶わなかったが、来シーズンもお付き合いしますので諦めないで再トライして下さい。

(木村 記)

ヶについて

皆さんは山の名前で槍ヶ岳や駒ヶ岳を「やりけだけ」とか「こまけだけ」と読む人はいないだろう。ではなぜヶを「が」と発音するのだろうか。そもそもこのヶは、カタカナのヶではなく个が変化したものであり、箇の一部からきたもので、本来の意味は竹なのだそう。一ヶ所、二ヶ所を「いっけしよ」「にけしよ」と発音する人はいまい。「いっかしよ」「にか

しよ」だ。このヶは箇からきていのである。つまり一箇所、二箇所なのである。

「やりかだけ」「こまかだけ」が言いやすい「やりがだけ」「こまがたけ」に変化したそうなのである。ある著名人はこのヶの使い方は誤用であると述べている。う〜ん、たしかにそうかもしれない。

(M)

ACC-J、水戸葵山岳会合同雪上訓練

2005. 4.9～10

参加者 菊地光夫、渡辺聡子、正木博美、木村一、吉田仁、木南真紀子、
松田尚、名雪博二(東京)、本図一統、他 2 名、水戸葵山岳会 9 名

山岳会界において、一部のクラブを除いて会員数の少なくなっている現在、我々アルパインクライミングを目指すクラブは、その傾向が特に顕著であり頭を悩ますところである。まあ今の我が会の状況を見ると、お世辞にもアルパインを目指す会とは言えないが、これも時代の趨勢であろう。今の体制で何か不測の事態が発生した場合、単一山岳会での救助が難しいのが現状である。そこで、会員の知識技術向上が遭難防止の観点からも重要との意味から、また、不測の事態には、お互い協力しあって対処しようということから、この合同による雪上訓練と救助訓練が昨年より始まった。

昨年は幹事会を葵でやっていただいたので、今年はACC-Jが担当する番である。今年は雪が多いとの情報は持っていたが、この目で確かめないと安心できない私の性格上4月3日に偵察に向かった。谷川に一人で向かうのなんて何十年ぶりだろうか。ACC-J茨城を結成する前は、土合で東京のメンバーと合流するため、よく一人で谷

川に向かったものである。偵察の結果、雪の量は十分で、訓練適地であり、さらに幕営や懇親会などをするのには白毛門登山口付近が一番良いであろうという結論に達した。

9日未明、茨城4名、東京から名雪氏、それと特別参加の小林さんと赤尾さんの7名が湯檜曾駅に集合した。水戸葵は会員の都合がつかず残念ながら10日だけの参加となった。湯檜曾駅に集まればいつものように宴会をして寝たのは当然である。

8時頃から訓練開始とした。いつものように適当な斜面で滑落停止やロープワークを行う。小林さんと赤尾さんはスキーは超がつくベテランで、山スキーはするもののロープを使う登山はしていない。今回はビーコン訓練を目的に参加したのであるが、お二人にもすべての訓練に加わっていただいた。お二人はフリークライマーでもあるため、ロープの扱いには慣れており、それなりに楽しんで訓練ができたと思う。一番長い時間を取って練習したのがビーコンである。去年よりも雪が多いので、

遭難者役のビーコンが深く埋められるので、もう少ししのところでなかなか探し当てられず苦労している人が多かった。赤尾さんはビーコン捜索には自信があつたらしく、小林さんにはデジタル方式を買い、自分は少し安価なアナログ方式で十分と思っていたようだが、「俺もデジタルの方がいいかな」なんて言っていたようであった。

夜は湯檜曾駅に戻り大宴会となる。遅くなって水戸葵の武藤さんたちと木村、吉田、木南、松田も到着し、宴会はさらに盛り上がった。夕食は久しぶりのカレーだった。以前、山の食事といえばカレーは定番だったが、食器を洗ったりするのが大変なためか、最近はメニューの中に加えられることが少なくなった。久しぶりに山（駅？）で食うカレーは格別であった。

10日。早朝には葵のメンバー全員が到着していたが、朝飯にキノコ汁を作っていたため、準備が遅れ葵の皆様を待たせてしまう。小林さんと赤尾さんは天神平でスキーとのことでここでお別れ。葵9名、ACC-J9名で昨日と同じ場所で川村講師の下に訓練を行う。訓練内容はいつもやっていることなので、あえてここ書くこともないと思う。ただ一つ気がついた反省点があった。それは自然とパーティがクラブ単位に分かれてしまうことだ。これでは合同訓練の意味がない。これについては我々幹事の責任がある。次回からは幹事がパーティを編成して、お互いの会員が混じって訓練できるようにしたいと思っている。参加された皆様ご苦労様でした。

（本図 記）



ロープワークの講習

GW 弾丸スキーツアー その1 岩木山

2005. 5.1

パーティ 木村一、菊地光夫、吉田仁、木南真紀子、渡辺聡子、
名雪博二(東京)、他 1 名

東北山スキー巡業最初の山、岩木山の麓に着いたのは東の空が明るくなりかけた頃でした。名雪ホームレスは既に到着し仮眠中なので、我々も少しの睡眠を取ることにし、ここ百沢スキー場駐車場の満開の桜が見守る中、深くて短い眠りに落ちていきました。

目が覚めて周りを見ると、目前にはまだ雪化粧した岩木山の美しい姿が我々を手招いて歓迎しているではないか！今回は菊地隊長のお勧めルート弥生コースを滑降することにし、弥生コースの下山口に名雪ホームレス号を駐車して上部駐車場の木村号の回収に備えました。岩木山スカイラインを走り、上部の駐車場からリフトに乗り一気に高度を稼ぎ、リフト終点からスキー&スノーボードを背負って岩木山の頂を目指しました。途中、徒歩で百沢コースを下る小笠原夫妻と下での再会を約束して、我々は岩がゴロゴロした登山道を頂上に向けてひたすら歩み続けました。岩木山山頂の祠に今回の山

行の安全と小笠原夫婦の??を祈願して、スキーを履き真っ白い大斜面に飛び込んで行きました。テレマークターンの毎に体が下に落ちて行くのが感じられ、スキー場のゲレンデでは得られない体感です。我々はこの感触を得るために自分の足で山に登り、頂から滑降するのも知れない。

岩木山頂上直下の大斜面は広大な一枚バーンでどこを滑っても快適に滑れる。しかし、滑降を続けて樹林帯入ると斜滑降が多くなり、スノーボード組の吉田、木南組にとっては辛い片斜面滑降が続く。幅の狭い沢を渡ると雪も無くなり、スキーをザックに取り付け重いスキー靴で林道とりんご畑の中の農道を歩くと、彼方に名雪ホームレス号の勇姿が見えてきた。振り返ると岩木山の頂上直下の大斜面に我々のシュプールが見えるような気がして気分の良い所だ。さすが菊地隊長のお勧めコースだ。

(木村 記)

山木 崇

その2 HAKKOU DA

2005. 5.2

パーティ 木村一、菊地光夫、吉田仁、木南真紀子、渡辺聡子、
名雪博二(東京)、他 1 名

前日に岩木山から八甲田山の箒場岱駐車場に移動し、宿泊。

前夜はACC-J 伝統のかまくらテントに菊地さんと名雪さんと 3 人で泊まるが夜中から雨になり、凍えながら朝を迎える。はーと息つくまもなく全員木村号に乗車。八甲田ロープウェイに乗り込み山頂公園駅に行く。山頂は霧の中。大勢のひとが行き交うなか、私たちも出発。

あまりに簡単に降りてはACC-J の名がすたると名雪さんが提案。そこで赤倉山をのぼり、大岳山の避難小屋で小休止し、大岳山山頂から箒場袋駐車場に向けて滑り降りるコースとなった。たははは。

大岳山山頂で徒歩組の渡辺夫妻と別れ滑り出す。とても良い斜面で快調にすべる。その頃には青空でとても気分がよかった。コースにはポールも立っており、

基本的にはそれから離れなければ遭難しないようになっている。滑りやすい大斜面を滑り降りたあとはほぼフラットに近い林間コース。スキーにはよくてもボードには大苦戦でした。もちろんコース取りの下手さもありましたが。

箒場岱駐車場に 5 人で到着した後は名雪号に乗り込んで木村号の回収へむかい、その後に、酸ヶ湯温泉に渡辺夫妻をお迎えにあがりました。その時で 2 時でした。八甲田山から下山し、県道沿いで食事したあと次の目的地の秋田駒に出発しました。

いやいやとても大変な 5 日間でした。次の日はへばったけど楽しかったです。

(木南 記)

その3 秋田駒ヶ岳

2005. 5.3

パーティ 木村一、菊地光夫、吉田仁、渡辺聡子、名雪博二(東京)、
他1名、

秋田駒、あきたこま。秋田駒で印象に残っていること。

田沢湖高原スキー場を歩く我らを横目に
大勢のお客を乗せたキャタピラが通り過
ぎていったこと。

途中にあった青と白だけの景色。

女目岳の頂上でみた眼下に広がる田沢湖。
一生懸命歩いたのに、下りではスキーや
ボードにかなわなかったこと。

のぼりもくだりもだらだらで他1名を裏
切ってスキーを持ってくればよかったと
とても後悔したこと。

下山後の温泉がなかなかよかったこと。

こんなところかなあ。

(渡辺 記)



スキーツアー初日。岩木山山頂にて

その4 鳥海山

2005. 5.4

パーティ 木村一、菊地光夫、吉田仁、木南真紀子、渡辺聡子、他 1 名

連休も残り少なくなり、今日と明日のみになった、名雪先輩も秋田駒で別れ一人阿仁村の山に向かった。私自身は今回の山スキーの中では一番の楽しみがここ鳥海山のスキーであった、以前2度のチャレンジをしているが2度とも失敗に終わっている。最初は祓川からで鳥海山のところまで行ったが強風の為下山、2度目は早朝より雨とガスがかかり視界も悪く途中より下山こんな訳で今回はぜひ登りたいと思っていた、この祓川のコースは全日本スキー連盟公認コースにも指定されているほどのすばらしいコースである。

早朝6時出発を予定にしていたが鳥海山特有の強風の為テントも吹き飛ばされてしまいそうな風だったので様子眺めにテントに待機していた、あまりの風でなれないパーティーや隣の天幕からビールの空き缶や外に出して置いたものが舞う音でさんざんだった、だが7時頃になるとなぜか風が少し弱まってきたので、我々パーティーは速い出発となる。天気は風が強いが空は明るくまずまずだった、今回の合宿前半から元気な小笠原夫婦が

トップをきって歩き出し木村氏、スノーボー組み小南、吉田と続く、風は相変わらず強いが皆馬力もあり、ぐんぐんと高度を稼ぎ鳥海の肩の付近でボード組みがヘルニャの為この辺で休み、あとの4人で山頂をめざす、約3時間半くらいで到着、これより鳥海の新山はこの山の反対側にあり、ガスが強く全然見えなく不安ながらも小笠原夫婦が元気よく出て行ったが、時より風に吹かれて反対側の稜線がみえ、ナイフリッジのところが見え、アイゼンをはいてこなかったのが危険なのですぐに戻って来たとのこと、相変わらず稜線上は風も強く雲の流れが早くときおり反対側の新山がよく見えた。休憩後準備をして、木村氏がトップで滑り出し後に続く、小笠原夫婦はスキー持参でないため歩いて下山、山頂からの滑りは素晴らしくよい、東北で一番じゃないかと思う位素晴らしい、雪の状態もよくスピードものり腕が上がったような気がした、ときより休みながら後続を確認しながら滑る、中腹の辺でボード組と合流その後は駐車場まで思い思いに滑る、素晴らしく好いの一言でした。(菊地 記)

鳥海山(2)

今回のGWの山行、どれが前菜、スープでサラダなのかはわからないが、メインディッシュが鳥海山であるのは間違いないだろう。祓川の駐車場から見上げる鳥海山はまさに巨大なスキー場、すでにお腹一杯になりつつあるけれどメインを頂かないわけにはいかんだろう。時間があることをいいことにゆっくりゆっくり味わうが、いかんせんお腹がほどよく満たされているのと強い向かい風&ガスによる視界不良という強烈な味付けのためになかなか足が進まない。マータイさんに言われなくても『MOTTAINAI』が染みついている我々は次回へと残せるはずもなく途中2回の休憩を経てなんとか七高

山の頂までやってきた。結構しょっぱい。七高山の頂上はさらに濃い味付けで新山がどこにあるのかさえわからなかった。その後一瞬だけ新山頂上が見えたのだが視界が2mもなく、強風が吹き荒れていたのものでそのまま下山することにした。メインの具は完食したけど味が濃すぎてソースを残してしまったってそんな感じ。下へと降りるにつれ視界も開けてきて、スキー組は気持ちよさそうに滑降り、あっという間に視界から消えていった。残された歩き組は途中シリセードを交えつつ13時ごろにみんなの待つ駐車場へ戻った。あ〜お腹いっぱい、満足満足。でも、デザートは当然別腹よね。(渡辺 記)



その5 月山

2005. 5.5

パーティ 木村一、菊地光夫、吉田仁、木南真紀子、渡辺聡子、他 1 名

東北山スキー巡業最終地の月山に着いたのは昨晩 20:00 を過ぎていた。本図さんご夫妻と合流後無事を祝って豪華な宴会。明日は月山リフトを利用する予定なので遅くまで祝宴が続いた。翌日も快晴。テントを撤収し、本図さんご夫妻と別れて月山スキー場の駐車場に車を走らす。月山には今まで山スキーに2回来ているが、2回とも霧に巻かれてどこを登っているのか、どこを滑っているのか全く分からないままで良い思い出は無い。今回は朝から雲ひとつ無い天気なので期待が持てる。しかし、菊池は今回の月山はお休みとの事。

ボード組の吉田、木南、徒歩組の小笠原夫妻、テレマークスキーの木村の5人で月山スキー場リフト終点からツボ足で登高開始。姥ヶ岳を巻くようにしてトラバースし稜線の夏道沿いに進む。今日は風も無く、高曇りの天候なのでバックカントリ一日和だ。時間はたっぷりあるので焦ることなく一步一步高みを稼ぐ。鍛冶小屋手前で雪が切れるので、這松帯にスキー&スノーボードをデポし頂上を目指

す。頂上の祠に安全登山の参拝をして左の方向を見ると、昨日滑った鳥海山を遥か彼方に望む事が出来る。岩木山から始まった今回の東北スキー巡業も八甲田、秋田駒ヶ岳、鳥海山と順調に滑り、今日の月山が千秋楽になる。秋田駒ヶ岳で別れた名雪さんは今頃どこを彷徨しているかなと思いを巡らす。北海道に渡って北海道の雪山を滑りまくるんだと言っていたが、風に任せて気の向くままの一人旅。羨ましい限りの贅沢に思える。頂上で記念写真を撮影後スキーをデポした場所に戻り、お待ち兼ねの滑降の準備開始。今日は視界もあるので各自思い思いのルートを取り、谷底目掛けて滑降開始。谷に下りすぎると最後の登りがキツクなるので、途中からは斜滑降で月山リフト終点を目指す。後はスキー場の中を滑るだけだが単調で面白くないので、左側の樹林帯の中にルートを採り林間滑降を楽しむ。駐車場には菊池が首を長くして我々を待っていた。仲間のありがたさに感謝しながら温泉に浸かり帰路についた。

(木村 記)

会越・六十里越～毛猛山～未丈ヶ岳縦走

2005. 5.11～13

パーティ 坂田英希

やぶこぎ【藪漕ぎ】

木・竹・草などが一杯生えているところを分け開き前進すること。

体の自由を奪われ苦痛であることが多く一般的には忌み嫌われる反面、特異な人々に愛される登山における行為。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

六十里越の国道は例年にない多雪で未だ開通の目途が立たず、JR只見線、田子倉駅から除雪途中の国道をしばらく歩く。国境トンネル入り口、湖側の斜面をひとつのぼりでロボット雨量計のある峠に立つ。エメラルド色美しい田子倉の湖面を愛でつつ、しばらくは雪堤を拾う。

多雪とはいえ前毛猛まではまだまだ標高が低く、藪漕ぎに従事する場面も多い。健気に咲くカタクリの姿がようやく来た春を感じさせる。

しんりよく【新緑】

晩春・初夏の若葉の緑。「一がまぶしい」若々しいエネルギーに満ち満ちた姿に「まだまだ自分だって」と背伸びをしたくなることも。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

前毛猛に立ってようやくこの山旅の全容が眼前に広がる。

毛猛山～未丈ヶ岳。その前衛の頂にあって毛猛ですら春霞にかすむ。

見下ろせば新緑美しいブナの本立にホッと、午前の瀟洒な陽に輝く湖面の向こうに村杉半島。

今日の行程も決して余裕はないのだけれどもここまで来てセカセカ行くのも馬鹿馬鹿しい。

幸いここからは雪堤もかなりのボリュームで繋がっている。時に藪を行くのもまた楽しである。

ざんせつ【残雪】

冬が終わり季節が変わってもなお消えずに残っている雪。

強烈な藪コギは嫌だけど道なき藪山を闊歩したいという身勝手な我儘を可能にしてくれる自然の恵み。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

毛猛までの道のりは遠い。見た目以上に雪堤は切れており藪を行くことも多かった。

残雪なき季節ならば容易でないことは明

白で、それは遥か彼方イスカンダルへ旅立つくらいに意気込みがなければ到底叶いそうもない。

シリセード〔s i r i - s a d e〕

積雪した斜面に己の臀部の丸みを利用し滑り降りる行為。尻制動。

登山における行動はスピーディー且つ楽しいことこの上なく、時にやりすぎズボンの痛みに涙することもしばしば。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

毛猛の頂は秘境たる雰囲気感を匂わせていた。うむ。これこれ。(喜)

直下の猛烈な藪を突破すれば今度こそは幅五間はあるかと思える雪堤。延々大鳥岳手前までは繋がっているようだ。

毛猛の頂から見定めておいた本日の幕場候補地までは時にシリセードを交えながら快適に高度を下げた。

どくず【読図】

地図に記載された等高線や記号などを基に情報を読み取ること。

情報の考察による判断は、社会生活にも似た行為であり、時に人生そのものではないかとも思える。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

明けて朝日と共に朝食とする

順調に進めば今日中に銀山平温泉に浸か

れる。それを励みに雪と藪とを繰り返し大鳥岳、そして未丈ヶ岳、日向倉山もすぐそこというときに濃いガスと冷たい雨。この山行では、視界を失うのが最も痛手である。方向感覚を読図能力に頼わざるをえなくなるからだ。

行って行けないことはなかったがこの状況下、冷静になる時間が必要だと思った。方角を失わないために日向倉の山頂付近に天幕を張り、食事をしたら半ば不貞寝のように寝袋に直行した。

みなみあいづ【南会津】(地域)

会津盆地南に広がる山々を有する地域。広義的には会越、奥只見、尾瀬、帝釈、駒止など。

いまだ静けさを保ち、原始の森に安らぎと恵みが残されている魅力の山々。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

翌朝、未だ濃い霧にため息をつきながら磁石を片手に銀山平に向けて歩き出す。地形考察を重ね想定路を外すことなくシルバーラインの銀山平トンネル入り口に降り立つ。

ここまでくれば一安心。小出の駅までどうしたものかはこれからじっくり考えよう。

ココロの憂いに南会津。

地味で素朴でゆるやかで。

喧騒に煩わされる日々、自分が渴きを覚えるのはそんな何気ない平穏のような気がしてならない。

それがホントの南会津。意味の核心でもあるわけです。

(坂田 記)



尾瀬 燧ヶ岳

2005. 5.22

パーティ 木村一、渡辺聡子、他 2 名

尾瀬の名峰燧ヶ岳に是非登りたいと言う渡辺さんと、スキーの名手小林さん、赤尾さんと私の4人でここ御池の駐車場に着いたのが昨夜。翌朝は山スキーに最適な天候の高曇り。

山に登るのだから天候は快晴が良いと言う人がいるが、山スキーには以下の理由で高曇りの天候が最適だ。快晴の天候では顔が日に焼けて真っ黒になってしまう事と、快晴では午後には雪がグチャグチャになってしまい滑りが全く面白くない事。御池から針葉樹林帯の緩斜面を抜け、急斜面登りきると広沢田代の広い雪原に飛び出す。木村、渡辺組はスキーを背負ってツボ足登高。小林、赤尾組はシール登高。熊沢田代で小休止後燧ヶ岳の頂きに向けて登高開始。ブナ疎林の急斜面を一気に登り熊沢田代に向けてスキーを走らせて、これに続く針葉樹林帯を抜けると、頂上に続く真っ白な斜面が我々を手招いている。燧ヶ岳では一番美味しい斜

面なので下りの滑降が楽しみだ。しかし、傾斜が段々増してくるのでそろそろ苦しくなってくる。燧ヶ岳（俎嶺）の頂上直下に飛び出した。渡辺、小林、赤尾の3名は紫安嶺の頂上を踏むと言うので私はここで昼寝を決め込事にした。風の当たらない場所を選びザックを下にして転寝をしていると渡辺、小林、赤尾の3名が帰ってきたので、準備をして滑降開始、さすがに小林、赤尾の両名の滑りは素晴らしい。私もテレマークターンで気分良く滑降開始。あつと言う間に熊沢田代に到着。ここの小高い丘の上で小休止。振り返ると燧ヶ岳が高く聳えている。更に快適に滑降し広沢田代の雪原を渡り、樹林帯を抜けるとあつと言う間に駐車場に到着。

ここ燧ヶ岳で今シーズンの山スキーも終了。

(木村 記)

南会津・実川硫黄沢

2005. 5.15～16

パーティ 坂田英希、笹平孝

「思い出は時に美化され額縁に飾られる。」

その昔、残された名言があるのかないか。

二年ぶり二度目の硫黄沢。はっきりしない梅雨空に雨はどうにか落ちていない。この程度は想定範囲内ではあった。前は梅雨の合間の晴れ間にイイ思い出ばかりが蘇る。そんな記憶のもとに今回の山行は計画されたのだ。しかし幻想はすぐに打ち破られた。

硫黄沢出合に一台の車。釣人と思しき入渓の影響は大きく、数も少なれば型も小さなオカズ。「こんなに悪かったっけか？」と思える高巻き、滝場、ヘツリの数々。

終わってるなあ。というのが率直な感想である。こころなしか沢の放つ威光さえも鈍って見えるのは天気と気分の問題であらう。

とはいえ、笹平さんがあげてくれたおかげで今宵も卓は彩り、酩酊するがよし。

「一度目のオドロキは二度と体験するこ

とはない。」

と、ある偉人が言ったとかなんとか。

明けて翌日は湿原をスルーして右の支沢へと入る。

幕場でも聞こえていたバスの音が次第に大きくなってきて車道は目と鼻の先であった。

ひとしきり食べ頃のコシアブラを採取したら、車道に乗っかりテクテクと歩く。途中、道草を食ってまたもやコシアブラ採りに夢中になっては車道に戻る。

ずいぶん分量を採取しずいぶん膨れたザックを見ると「何がそんなに入ってるの？」と我ながら驚いてしまうほどである。

結局、御池までは車道を歩き、そこから二時間待ちでバスに乗り込み七入へと下った。

「良いも悪いも我々が思ったほど良くも悪くもない。現実とはそういうものである」

そう語ったのは、誰であったか。まあ、誰でもいいか。

ともかく幻想に彩られた一筋の水線は現

実にはそれほど良くも、そして悪くもないというのが真実であろう。

思いつきの語り部で軽妙に気分を変えるくらいの気楽さが丁度良い。そうして気持ちいい風を魂に吹かせばいつの間にや

らプラマイゼロ。何の問題もない。

数日後、コシアブラのテンプラを頬張りながらそんなことを考えていた。

(坂田 記)



屈曲したゴルジュ。出口にて

西表島 2ヶ月間サバイバル生活

2005. 3.17～5.21

パーティ 笹平 孝

西表島には過去に2002年の秋と2003年の夏に訪れ、今回で3度目になる。

これが最後の西表島サバイバル生活になるので、存分に大自然を満喫するために、前回の1ヶ月間サバイバルよりも倍の、2ヶ月間サバイバルをやる事に決めた。

3月17日（晴れ） 羽田－石垣島－西表島－南風見田

石垣島はすでに夏の日差しが照り付け蒸し暑く、離島桟橋には水着姿の若者がベンチに座っていた。

近くにある郵便局に行き、帰りの衣類が入った荷物を預けるため、西表島の郵便局へ局止めで送る準備をする。係員に2ヵ月後に荷物を受け取るというと、3週間までしか駄目ですと返ってきた。何か良い方法があるか考えたけれど、仕方が無いので諦めるしかない。

あわただしく買い物を済ませ、12時の船で西表島へ向かった。大原港から大原郵便局へ行き、自宅から送っておいた重さ30キロのザックを受け取る。近くのスーパーで泡盛などを買い込み、この時点で荷物の総重量は60キロを超えている。

ここからタクシーに乗り道路終点の南風見田の浜まで移動した。ここにある東屋のテーブルに荷物を広げ、5月分の食料と帰りの荷物を砂の中に埋めてデポする。

予定では鹿川へ向けてさらに進む予定だったが、とても暑いので今日の行動はここまでとした。南風見田の海では今がモズクの旬で、モズクを採っている人や泳いでいる人達がいる。さっそくシュノーケルを付けて初泳ぎ。浅瀬にはモズクがまとまって辺り一面にあり、海の中に座って丁寧に砂を落としながら水筒に入れて採った。

夜、東屋でモズクをつまみに泡盛を飲む。あまり酔は好きじゃないが、モズクはしょう油だけより酔を入れた方がとてもおいしいと感じた。余ったモズクは塩漬けにして砂の中に埋めておく。

夜中、寒くて目が覚める。気温を見ると17度だった。夏の服装しか持っていないので、雨具を着込んでもシュラフカバーだけでは寒くてほとんど眠れない。

3月18日（曇り時々晴れ） 南風見田－クイラの岩場

ザックの重量は50キロはあり、担ぎ上

げるだけでも一苦労する。3年前に来た時には2時間で行けた所まで、今回は4時間もかかった。ここからゴムボートにザックを乗せて、海の上を引いて行く。非常に楽になり、ペースを上げて進むことが出来る。やがて潮が引いてリーフが現れ始めると、ゴムボートの底を擦るようになり、クイラの岩場手前ではほとんど進まなくなった。

クイラの岩場からはゴムボートに乗って海を渡る予定だったが、風と波には歯が立たず、ゴムボートはあえなく撃沈。もうすぐ暗くなる時間なので、急いで絶壁の岩場に取り付く。ロープが2本下がっていて、1本は頼りない物だった。荷物を3個に分けて2個はロープに結び、もう1個は背負って登る。登り終った所で体をロープで固定し、残りの荷物を引き上げ始めるが、一番重い荷物が出っ張った岩に引っ掛かり、全く上がって来ない。岩場から身を乗り出し、やっとの思いで荷物を引き上げた。

すでに日は沈み薄暗くなっている。ヘッドランプを付けて横になれる所を探しながら海岸を降りて行くと、岩棚を過ぎた所で半洞窟状のスペースを発見しホッとす。近くの岩場には水が流れているのでもう安心だ。おかず調達に海へ行き、モリでいいサイズのイシガキハタを突いて刺身で食べた。

夜中、気温は15度まで下がり、今日はひ

どく疲れているのに寒くて何度も起きてしまう。

3月19日（曇り時々晴れ） クイラの岩場
—鹿川

出発してまもなく岩場の所で行き詰まる。ここは潮位が低ければ海周りで行ける所だが、今は無理そうなので10メートルほど小さく高巻いた。その後、アップダウンのある巨岩帯を重い荷物でヘタリそうになりながらも、必死になって通過し、今回のベースキャンプ地である鹿川に到着した。

テントとタープを張り、さっそく獲物の調達にかかる。ルアーを投げ魚をゲット。砂浜を歩いているカニを捕るために、バケツを砂の中に埋め、落とし穴を仕掛けたりもする。翌日、カニが4匹入っていた。

3月20日（快晴） 鹿川

キャンプ地周辺を散策してみる。野生のパナナやパパイアが多くあり、青いパパイアは野菜として炒めたり味噌汁で食べた。

夜釣りをすると、大きな魚が10号のハリスを次々に切ってしまい、釣りにならない。

3月21日（晴れ） 鹿川

磯へ釣りに出かけ、ブルーの魚が2匹釣

れた。イラブチャー系の魚は身がやわらかいので好きじゃないからリリースする。

昼に小麦粉でうどんを作ってみる。以前、薄力粉で作ったら失敗したので、今回は強力粉を持って来た。小さなまな板では細く切るのが大変だったが、予想に反してコシがあって良いうどんが出来た。

明日は移動するので、後半分の食料や酒などを鹿川の浜にデポする。

3月22日（晴れ、夜から嵐） 鹿川－ウダラ

早朝、浜に打ち上げられた生きているスルメイカを発見。刺身と塩辛と網焼きで食べる。荷物が多いので撤収に1時間30分もかかった。鹿川から山を越えてウダラへ向かう。途中、ウダラ川の間地点にある崎山へ続く分岐の所に食料をデポする。

ウダラ到着すると、2年前には三人ほど住んでいる人がいたが、現在は一人だけになっていた。夕方、飯の準備をしていたら、分岐の所にガスボンベを全てデポしてしまった事に気づく。ここにいる数日の間は、焚き火に頼るしかなさそうだ。

夜から雷雨になり、西表島に来て以来初めての雨となる。やがて深夜には、雷がバンバン鳴り猛烈な雨と強風が伴い、まるで台風のような嵐になった。強風でテントが今にも潰れそうで、物凄いスコールと5秒間隔で鳴っている雷には驚い

た。こんな状況では外には出れないので、たとえテントが潰れてもテントの中でじっとしてるしかない。この状態が1時間ほど続き、さらに3時間後に再び同じような嵐がやって来た。今まで経験した事の無い嵐が過ぎ去ったのは、朝方の5時だった。器に溜まった雨水の量から、二回の嵐で200ミリくらいの雨が降ったと思う。

3月23日（曇り） ウダラ

ほとんど眠れないうちに朝になり、海を見ると濁流で海全体が濁っていた。昨日の夜からずっと強風の北風で、たまに20メートルくらいの強風が吹き付けている。

昨日集めた薪は濡れていて、ライターでは火がつきそうに無い。焚き火をしないと何も食べることが出来ないのも、あまり湿っていない立ち枯れしている木を集めて薪に使う。それでも簡単には火がつかないので、次回から消し炭を集めておき、これを着火剤として使った。

大学の4人パーティーが鹿川からやって来た。ここで一泊して、明日は船浮に行くそう。学生達は浄水器を使っていて、その隣で濁った川の水を水筒に汲んだら驚いていた。

3月24日（晴れ） ウダラ

風も無く良い天気になり、海へカキを探しに行く。ミナミコメツキガニが潮の

引いた干潟に大群で群がっている。警戒心が強く、近寄ると回転しながら砂に潜って隠れてしまう。昼過ぎからウダラ川へ行き、釣りを始めると急に強い北風が吹き始めたので中止し、マングローブ林の散策に切り替える。マングローブ林の中にある水溜りには大きなシレナシジミがあちこちに転がっているが、この貝は大きな殻の割には身が小さいので拾わない。

3月25日（晴れ） ウダラ

今日、33歳の誕生日をウダラで迎えた。強い北風も納まり、穏やかな東風に変わる。

廃材を使って小さな炭ストーブを作る。火力は弱いが意外と使いやすいので、ガスコンロの代用になる。

夕方、テントの横に立つ木に登り、乾燥して縮んでいるキクラゲを採る。

3月26日（晴れ） ウダラ-アヤンダ川-
ウボ川-崎山（山越えルート）

満潮時にウダラ川を渡渉するとザックが濡れるので、干潮の時間をみてウダラのキャンプ地を出発する。

ウダラ川に登り、分岐の周辺にはテープがたくさん巻いてある。デポした食料を回収し、コルを目指して斜面を登る。道は無くテープを頼りに林の中を進んだが、いつの間にかルートから外れてしま

った。尾根に出た所で木登りをしてコルを探す。コルは下の方で、かなり登り過ぎていた。

尾根を下りコルに着くと、しっかりした道があったので驚いた。この道はウダラと崎山を結ぶ旧道で、現在はイノシシ獺などに利用されているようだ。尾根沿いに付けられた道は枝沢を越えると、沢通しの不明瞭な道に変わった。赤テープに助けられアヤンダ川本流まで来ると沢登りに変わるが、水量は少ないのでほとんど濡れずに進んで行ける。アヤンダ川上部から再び道が現れると、まもなくコルに到着した。

コルからは反対側のウボ川へ下る。ヤブっぽい道に赤テープがあり、シダ植物をかき分けて進む。途中、右岸から左岸にルートが変わり、やがて河口のマングローブ地帯になる。川の中は泥深くて身動きがとれなくなるので、マングローブ林の中を進み崎山湾の広い干潟に飛び出した。

崎山村跡には2年前に人が住んでいたが、ボロボロになったテントがあるだけで誰もいなかった。ここには大きなデイゴの木が数本あり、真っ赤な花が咲き乱れている。テントを張り、水場に管を設置して汲みやすくした。ここは夜になるとカエル、大コウモリがうるさい。

3月27日（曇りのち晴れ、夜から雷雨）

崎山

西表島でシーカヤックが遭難した事をラジオで知る。ガイドと客の3名が強い北風で流され行方不明になっていた。数日前に自衛隊のヘリが飛んでいた事を思い出す。

崎山村跡の散策と裏山へ続く道を行ってみる。裏山の上部まで整地されたスペースがあり、思っていたより規模が大きい集落跡だった。道はさらに奥へと続き尾根に出た。この道はおそらく反対側の海へ行くルートと思われる。それから、近くの川で魚釣りをすると魚が入れ食いで、40センチの大きなマングローブフィッシュが釣れた。

昼に3人組が歩いて来た。話をするとサトウキビ刈りの仕事をしていた人達で、仕事は17日に終わったそうだ。

ここは携帯電話が圏外なので、パイミ浜近くのリーフまで行き電話とメールを使う。リーフで魚をモリで突いていると、先程の3人組が来てシャコ貝探しを始めた。帰る途中でタカセ貝とクロチョウ貝を見つけた。

3月28日（晴れ時々わか雨） 崎山

川にカニ網と大ウナギの仕掛けをかける。その後ミナミクロダイを釣る。

3月29日（曇りのち雷雨） 崎山

大ウナギの仕掛けにライギョの仲間が

かかっていた。この魚はおいしくないの
でリリースする。カニ網には何も無し。
昼過ぎから雷を伴う大雨で何もできない。

3月30日（曇り） 崎山ーパイミ

昨日の夜からずっと風が強い。テントを撤収してパイミ浜へ移動する。シャコ貝3個とタカラ貝を4個拾う。前回、パイミ浜にテントを張った場所は風がまともに当たるので、水場入り口から10メートル林の中に入った所にテントを張る。

3月31日（曇り時々晴れ） パイミ

周辺を散策する。昔、人が住んでいた形跡がいくつかあり、裏山の斜面にはヤシガニが掘った巣穴が多い。ここの川は小さな沢になっていて魚釣りはできないので、大ウナギの仕掛けをかけた。

干潮時にリーフの先端で釣りをして、魚を2匹釣る。リーフの浅瀬でタコがスミを吐いて逃げているので、バールで捕まえた。

4月1日（曇りのち晴れ） パイミ

拾った鍋で海水を沸かして塩作りを始める。夜の9時からヤシガニ探しに出かける。すぐにヤシガニ（中サイズ）を捕まえた。ヤシガニは小さくてもハサミが強力なので、素手で捕まえるのはとても危険だ。今回は大きな網の袋を使った。

山の斜面の所で木の根元に掘った巣穴

の中に、大きなヤシガニの足だけが見えた。棒で突いても出てこないの、下側にある巣穴から枯れ枝でいぶしたがダメだった。諦めて戻る途中、沢沿いで大きなヤシガニを捕まえる。それから、沢の中をライトで照らしてモクズガニを捕まえた。この時、大ウナギがいたのを確認する。テントに戻った頃には深夜の1時を過ぎていた。

4月2日（晴れのち曇り） パイミ

朝から北西の風が強く、海は高波でも入れないくらいだが、テン場は林の中なので風の心配ない。海水を何度も足して300グラムほどの塩が出来上がった。昼にヤシガニ（中サイズ）を茹でて食べた。身はタラバガニとほとんど同じ味で、腹の中にあるミソは、ほろ苦くて濃厚な味がする。

ここの沢にもテナガエビがたくさんいる。しかし、そう簡単には捕まえられない。今回、ペットボトルを使ったりしたが、一番多く捕れた方法は夜突きだった。

4月3日（晴れ時々曇り） パイミ

今日も朝から北風が強く、海で漁はできない。朝、沢へ見に行くと大ウナギがかかっていた。体長50センチの小さな大ウナギ。晩飯の蒲焼が確定する。

昼にヤシガニ（大サイズ）を茹でた。お腹一杯になって少し残す。

夕方、大ウナギを調理するが、皮がなかなか切れない。頭と骨を焼いてウナギのタレを作る。炭火で焼いて大ウナギの蒲焼を食べた感じとしては、少し泥臭い、身が締まっていて硬い、皮がゴム、油分ナシ、背ビレの骨が気になる。後から蒸したら身が柔らかくなり、かなり改善された。普通のウナギと比較すると、まったく話しにならない味だ。

夜、8時からヤシガニ探しに出かける。前回、ヤシガニの足だけが見えた巣穴近くで、特大のヤシガニを発見。足の大きさからして、あの時のヤシガニに違いがない。足を広げると50センチを超える大きさなので、捕まえるのに時間がかかった。重量が2キロはあり、ずっしりと重い。

4月4日（快晴） パイミ

パイミ浜周辺を散策する。浜の北側にも1ヶ所だけ水場、テン場があった。

夜になると上空は星がきれいに見えて天の川も良く見えた。9時から南十字星を見に、ヌバン崎まで潮が引いて浅くなったリーフを歩いて行く。夜の海は一人だと怖い。40分でヌバン崎に到着。ここまで来ないと南の空が見えないので苦労する。南十字星は下のほうにある雲に隠れて見えなかった。水平線ギリギリの10度くらいの角度に見えるので、この雲があると南十字星の全体を見ることができない。帰り道、大きなマツカサ貝をたくさん

ん捕り、12時ごろテントに戻った。

4月5日（快晴） パイミ

朝の気温は13度で、昨日の夜は寒くて1時から4時までの3時間しか眠れなかった。日の出前に浜に出ると、寒さで動けず巣穴に戻れなくなったカニを6匹拾う。

昼には28度まで気温が上がり、真夏の日差しになる。ヤシガニ（特大サイズ）を茹でて食べる。カニミソの油がギトギトですぐにお腹一杯になり、3分の1残す。夕方になってもお腹が空かないので、米は炊かないでおく。夕飯は残ったヤシガニとマツカサ貝で済ませた。

4月6日（快晴） パイミ

少し風邪ぎみで体がだるい。今日は紫外線が強烈。前に捕まえたウツボがバケツから脱走して近くで死んでいた。米に水を入れずに火にかけて焦がした。

4月7日（雨のち曇り） パイミ

昼には雨が止み、ウェットスーツを着て海に潜る。サザエ、タカセ貝が3個ずつ捕れた。浜に上がると風があり寒い。沢の水を浴びるともっと寒い。

4月8日（晴れ） パイミ

テン場近くでワイヤーを拾ったので、奥の方にイノシシの罠を仕掛ける。昼に海へ行き、岩の隙間にアバサー（ハリセ

ンボン）がいたのでモリで突いたら、海水を取り込んで大きく膨らみ、岩の隙間からなかなか出てこない。モリが根元から折れてしまったが、なんとか引き出し焚き火で丸焼きにして食べた。

夜、11時過ぎにヌバン崎まで南十字星を見に行く。今の時期は南十字星の南中が12時なので、その時間帯に合わせる必要がある。ヌバン崎に着くと、水平線の上に念願の南十字星が見えた。その後、大潮で潮が引いた海でマツカサ貝50個、サザエとクモ貝を3個ずつ捕る。その他にタコを捕まえたが、いつの間にか袋から逃げられた。結局寝たのは朝の4時ごろになった。

4月9日（晴れ） パイミ

9時過ぎに起き、浜に行くとチャーター船でここに上陸した2人組みと会う。今から鹿川まで歩いて行くそうだ。天体観測機器の仕事をしている人がいて、昨日その人も白浜から南十字星を見たようだ。何だかんだと昼頃まで話し込む。

午後から海に潜り、2時間でタカセ貝を12個、クモ貝を7個、サザエを2個の収穫だった。マツカサ貝を含め、貝を茹でたりする作業が7時過ぎまでかかった。

4月10日（晴れのち曇り） パイミーウビラ川

テントの撤収で3時間かかった。干潮の

時間に合わせて12時過ぎに出発、3時間でウビラ川に着いた。半洞窟の中にテントを張る。

硬いマツカサ貝の燻製を食べ過ぎて、奥歯の歯ぐきが炎症を起こす。

4月11日（曇りのち晴れ） ウビラ川ー鹿川手前の浜

朝から釣りをして小物2匹、30センチオーバーのミーバイに逃げられた。2時に出発し、シャコ貝を2個とクモ貝を2個拾う。落水崎と鹿川の間にある大きな浜でテントを張った。シャコ貝を刺身で食べる。

4月12日（曇り時々晴れ） 鹿川手前の浜ー鹿川

昨日の夜、浜でカニを8匹捕まえた。11時から鹿川へ移動。鹿川にデポした食料と酒を無事に掘り起こす。

4月13日（曇り） 鹿川

パンを焼いて、パパイアのツナサラダを作った。奥にイノシシの罟を仕掛ける。夕方、単独の女性が南風見田からやって来た。

4月14日（曇りのち晴れ） 鹿川

リーフ歩きで穴の開いた靴を縫う。昼に揚げパンを作って食べる。

4月15日（快晴） 鹿川

朝、浜に行くと大物仕掛けに魚がかかった形跡があったが何もいない。山から青いバナナを1房採ってくる。

4月16日（快晴） 鹿川

昼前、海上保安庁の大きな船が来た。ゴムボートで浜に上陸し、いろいろと聞かれた。浜でペットボトルに入った米を拾う。

東京から来た単独の青年と会う。この人は半年間ほど南風見田のキャンプ場において先月東京に帰ったが、今回シーカヤックで遭難したガイドの友人で、ニュースを知り西表島に戻って来たそうだ。

台湾から飛んで来た飼い鳩が2羽住み着いている。（羽の裏側に飼い主のハンコが印されている）

4月17日（曇りのち雨） 鹿川

昼に30センチの魚を釣り、刺身で食べる。夕方から雨が降り出す。

4月18日（雨のち曇り） 鹿川

昼過ぎまで強い雨が降り、テントの中で過ごす。川から泥水が流れ込み海は汚い。

4月19日（曇り） 鹿川

大物仕掛けに魚がかかった形跡があり、大きな針が伸びていた。

4月20日（曇り） 鹿川

テント内にはアリが多い。毎日食べる量が少ないからすごく腹が減っていたので、今日の夕飯は米2合とシチューと焼きそばを食べたが、満腹にはならなかった。

4月21日（晴れ） 鹿川

昼過ぎにガーラの群れが浅瀬に来て、小魚が浜に打ち上がっていた。ガーラは水面の小魚をバシャバシャと食べていて、まるで養殖場の様な光景だ。ルアーを投げるとヒット、すぐにバレる。ダツがメタルジグに歯の跡を多く残し、ボロボロになってきた。

4月22日（晴れ） 鹿川ーウダラ

ウダラへ移動。シークワーサーの花は終わり、あずき大の実が付いていた。ウダラの干潟にはすごい数のミナミコメツキガニがいて、辺り一面にカニの大群が広がっている。

午後から海へ、海水はまだ冷たい。ウエットスーツを着てイモ貝を2個拾う。

4月23日（晴れのち曇り） ウダラ

対岸の岩場にダイビングツアーの船が止まっていたので、昼に船の近くで泳ぐ。岩場でカキを15個くらい持って帰る。急にスコールが降り出し、雨の中テントの上にタープを張った。

4月24日（晴れ） ウダラ

ウダラ川でミナミクロダイを釣っていると、船が来てガイドと一緒に3人が上陸し、少し話をする。

4月25日（曇り時々雨） ウダラ

スミストーブでコーヒーを沸かす。ウダラに来てから蚊が多い。朝の気温はだいたい24～25度。

干潮時にイモ貝探しに行き、イモ貝を6個とクモ貝を1個拾う。甘い物が無性に食べたい。立ちくらみが最近多くなる。

4月26日（雨） ウダラ

朝から雨で何も出来ない。

4月27日（晴れ） ウダラー船浮

濡れた物を乾かして、2時に出発する。1時間30分でイダの浜に到着し、2年前と同じ場所にテントを張る。その後、売店へ行き泡盛などを買ったら、ピーマンとトマトを貰う。

4月28日（晴れのち曇り） 船浮

朝食、昼食用にパンを500グラム焼く。とても量が多い。昼に栃木県から来た単独の人と話をする。今日から観光客が多くなった。4時から海に潜り、クモ貝とイモ貝を拾う。少し寒かった。

6時に売店へ行くとダンボールに入った荷物が運ばれて来たばかりだったので、

棚に品物を並べる手伝いをした。ビール2本とヨモギ餅を貰う。

4月29日（晴れ） 船浮

昨日仕込んだパンを焼く。3年前に知り合った地元の人と一緒に、3時から泡盛を飲む。夕方、そうめんチャンプルをご馳走になって、7時にテントへ戻る。

4月30日（晴れ） 船浮ー白浜林道ー祖内ー浦内川

朝一番の船に、出航ギリギリ30秒前に乗り白浜へ渡った。バスで祖内の郵便局に行き、余分な荷物を大原郵便局へ送り、買出しをしてから白浜方面へ歩いて戻る。

旧道に入り、昼過ぎから白浜林道を歩く。1時間後に林道はヤブだらけになり歩き難くなった。しばらくすると道は完全に無くなり行き詰る。周辺を1時間ほど探索したが、辺りは密林で獣道も無いようだ。白浜ー大富横断は諦めて戻る。歩いて浦内川まで行き、ウタラ炭鉱の近くでテントを張る。

5月1日（晴れ） 浦内川ー船浦ーテドウ山ー浦内川（カンビレーの滝）ー第1山小屋跡

朝一番のバスに乗り船浦へ。バスは観光客が多い。船浦から登山口までの道ではカヌーツアーの車がたくさん通る中、パイナップル畑を見ながら歩いて行く。

テドウ山の入り口が分かり難いので少し迷う。テドウ山の登山道を行き、途中からピナイサーラの滝上に行ってみる。滝上にはカヌーツアーの客で賑わっていた。テドウ山頂上から北に10メートル進んだ所からは、エメラルドグリーンの海が見渡せる。

竹の子を何本か採って、浦内川方面の登山道を下る。登山道は少し分かり難い所があるが、赤テープがあり迷うことは無かった。4時に浦内川のカンビレー滝近くに降り立ち、7時に第1山小屋跡に到着した。

浦内川に入り、全身水浴びをして体を洗う。近くで大ウナギがゆっくりと泳いでいた。

5月2日（晴れ） 第1山小屋跡ー古見ー大富ー展望台

9時に出発。分岐では古見ルートの標識が外され、大富に抜けるルートだけになっていた。今回は古見に抜けるルートを進む。始めの頃はなんとなく歩けるが、次第に道が分かり難くなった。倒木、シダ類、ツルアダンで道が塞がれている所が多い。

11時頃、単独で来ていた林野庁の人と会う。落ちている標識を整備していた。話をすると、ここの登山道は現在立ち入り禁止らしい。それと、実際のルートと地形図に書いてあるルートは違っている

と言っていた。確かにここに来るまで、木に付いた赤いペンキマークを頼りに歩いて来た。

前良川沿いの道になると分かり易くなり、最後の方で支流の渡渉が数ヶ所ある。そして、放牧場のわき道を過ぎると道路に出た。

3時にバス停に着き、バスを待っているときさっきの人と再び会い話が盛り上がる。大富でバスを降り、買出しをしてから展望台まで歩く。展望台は新しく立て替えられていた。

夕方、ライトで蛾を採集しに来た人と会い、夜には民宿の車で客が6人くらいここに何かを見に来ていた。

5月3日（晴れ） 展望台－大原－南風見田

単独の人が2組とトンボのヤゴを探しに来た人が来た。展望台にいと、いろんな趣味の人と会える。11時にここを出発し、キビ刈の人から聞いていたお勧めの食堂の一つである大富のやすみ屋でカツ丼を食べる。

大原の郵便局に荷物を取りに行くと、3日から5日は定休日だった。荷物は後で取りに行く事にして、買出ししてから南風見田の浜まで歩いた。砂に埋めていた帰りの荷物や食料を掘り起こし東屋で泊まる。

5月4日（晴れのち曇り） 南風見田

南風見田の浜は、観光客が昨日よりもずいぶん減って20人くらいだ。昼から奥の浜に移動してテントが張れる場所を探す。隣の住人に声をかけてから整備された空きスペースにテントを張った。この場所は、3月に目の前を歩いた時には住んでいる人が居たが、最近出て行ったみたいだ。

テン場の近くを流れる小さな川で、ザックやシュラフカバーなどほとんどの物を洗う。夜、海に入りクモ貝を4個とタカラ貝を捕った。今夜は熱帯夜で暑く汗をかく。

5月5日（曇り時々晴れ） 南風見田
浜でのんびり過ごす。

5月6日（曇り時々晴れ） 南風見田

大原へ向かって歩いている途中、豊原を過ぎた所でカヤックガイドの人が車に乗せてくれた。せっかくなので、古見の野生生物保護センターまで乗せてもらう。見学が終わってからバスで大富に行き、やすみ屋でしょうが焼き定食を食べる。700円でボリュームがあった。

大原の郵便局で荷物を受け取り、余計な物は大原の神社にデポする。買出しをしてテントへ戻った。

5月7日（晴れ） 南風見田

浜でのんびり過ごす。

5月8日（晴れのち曇り） 南風見田

昼からリーフで釣りをするがダメで、泳いで大きなタカセ貝を6個捕った。

5月9日（晴れのち曇り） 南風見田

浜で25センチのコトヒキを釣り、昼にカルパッチョを作って食べる。昼からリーフでルアーを投げていたら、足にルアーを引っ掛ける。針が外れないのでナイフで皮膚を切って外した。サビキ釣りで25センチのアイゴが釣れたので刺身で食べる。

5月10日（曇り） 南風見田

昼から釣り。小物ばかりなのでシャコ貝探し。リーフでシャコ貝を見つけた。

5月11日（晴れ時々小雨） 南風見田

昼過ぎにシュノーケルを持って、離れた場所へ遠征する。シャコ貝を2個とタカセ貝を捕った。

5月12日（曇り） 南風見田

浜でのんびり過ごす。

5月13日（快晴） 南風見田

牛の放牧場へ行き、キノコ探しをする。白色のキノコが数本採れた。帰り道の途中で、道路わきのアセロラを採って帰る。

夕方からリーフで釣りをする。小さなカニを丸ごと餌にしたら大物がかかった。引きが強いので時間をかけて手前まで寄せると、足元の岩陰に潜り込んでビクともしない。竿をサンゴのすき間にさし込み、急いでモリとシュノーケルを取って来る。

海に入り岩の隙間を覗き込んでもなかなか魚の姿が見えず、10分くらいかかってモリを魚の頭に刺した。50センチのイシガキミーバイだった。刺身、バター焼き、アラ汁でたらふく食べてもまだ余っていた。

夜の10時に南十字星がハッキリと見れた。

5月14日（曇り時々晴れ） 南風見田

気温が29度まで上がりとても暑い。浜でのんびり過ごす。

5月15日（曇りのち晴れ） 南風見田一大原

昼過ぎに南風見田の浜を出発。大原のスーパーで本マグロの刺身を買ひ、デポを回収して港に行く。東屋には蚊が多く、防波堤に移動。ここにも蚊が多く、虫除けスプレーをかけても蚊の音が気になって一睡もできず朝を迎えた。

5月16日（晴れのち雨） 大原－石垣島

朝の6時から仲間川遊覧船乗り場へ行

き、防波堤で1時間ほど寝る。9時から遊覧船に乗り仲間川を見学。

11時の船で石垣島へ行くと雨が降っていた。バスターミナルに荷物を置き、街の中を散策する。

南楽園キャンプ場へバスで移動。テントを張る時、ムーちゃん（キャンパーネーム）がいろいろ教えてくれた。中央の休憩所近くにテントを張り、夜はこの長期キャンパー達と一緒に酒を飲む。このキャンパーはみんな外見は濃い感じだけどすぐに慣れた。

5月17日（晴れ時々わか雨） 石垣島

キャンプ場のレンタサイクル（1日250円）で街へ行く。とても暑く真夏の太陽だ。食べ放題の店ガストロへ行き、焼肉を食べまくる。

5月18日（晴れ時々わか雨） 石垣島

今日もレンタサイクルで街へ。今日も暑いのでエアコンが効いた場所で涼む。キャンパーが毎日食べに行く食堂さつきに入る。日替わり定食だけセルフサービスとは知らずに座っていたら、店員に声をかけられた。ご飯と味噌汁はお替り自由で500円。午後から図書館に行き、インターネットが無料で使えるマルチメディアセンターに行く。夕方、近くのビーチ

でひと泳ぎしてキャンプ場へ戻る。

5月19日（晴れ時々わか雨） 石垣島

レンタサイクルで石垣島の中央部を一日かけてぐるっと周る。パイナップル畑にはまだ小さなパイナップルがたくさんあった。

5月20日（雨時々曇り） 石垣島

3年前に西表島の崎山で会った人とキャンプ場でばったり会う。この人は去年の夏に鹿川で過ごし、そこにビーパルの取材が来て、ビーパルに載っていると言っていた。明日、鹿川へ行くそうだ。後日、ビーパルを見たら鹿川に住んでいる様子が書かれていた。

昼にキャンパーに教えてもらった、なかよし食堂で500円のしょうが焼き定食を食べる。

5月21日（晴れ） 石垣島

キャンプ場からバスで空港へ移動。長かった西表島での2ヶ月間サバイバル生活が終わる。昼の飛行機に乗り、夕方には茨城に戻った。

（笹平 記）

《友好山岳団体の月報・会報・その他》

ありがとうございました

—— 月報 ——

◎ろうまん山房通信 NO.12.13 2005.1 B5 12P Rohman Sanbow

安達太良・吾妻・女沼男沼、足尾・深沢、南会津・二岐山、まんぼうの小千谷訪問記
ほか

◎ろうまん山房通信 NO.14 2005.2 B5 12P Rohman Sanbow

雪上訓練・二岐山、戸隠山スキーほか

◎ろうまん山房通信 NO.15 2005.3 B5 8P Rohman Sanbow

二岐山々スキーほか

◎ろうまん山房通信 NO.16 2005.4 B5 13P Rohman Sanbow

峠の茶屋雪下ろし、関温泉山スキー、OB山スキー山行、川内山塊ほか

◎ろうまん山房通信 NO.17 2005.5 B5 18P Rohman Sanbow

奥利根・雨ヶ立新人歓迎山行、会津、平石山山スキー、上越・桑ノ木山、柄沢山山スキーほか

◎ろうまん山房通信 NO.18 2005.6 B5 18P Rohman Sanbow

春山合宿・川内山塊・矢筈岳ほか

◎ろうまん山房通信 NO.19 2005.7 B5 18P Rohman Sanbow

東北。保呂内沢、OB山菜山行、足尾・三重泉沢、奥多摩・氷川屏風岩、水根沢ほか

◎ろうまん山房通信 NO.20 2005.8 B5 18P Rohman Sanbow

春の集中・会越・貉ヶ森山、南会津・叶津川芳沢～赤崩、北ア・梅池～白馬岳～樺平
ほか

◎まほろば NO.11 2005.1 B5 30P まほろば山岳会

吾策新道～万太郎山、茂倉新道～谷川岳～田尻尾根、天神平～谷川岳～田尻尾根、南
会津・小豆温泉～巽沢山ほか

◎まほろば NO.12 2005.2 B5 8P まほろば山岳会

南会津・山毛櫟沢山、小立岩～幽ノ沢右岸尾根～山毛櫟沢山、田代林道周辺ほか

◎まほろば NO.13 2005.3 B5 16P まほろば山岳会

上越・玉原～鹿ノ俣山、冬の集中・南会津枯れ木山、奥日光・宿堂坊山東尾根ほか

◎まほろば NO.14 2005.4 B5 8P まほろば山岳会

南会津・西根川林道～くずれ沢右岸尾根～田代山～帝釈山ほか

◎まほろば NO.15 2005.5 B5 32P まほろば山岳会

上越・柄沢山左岸尾根～柄沢山、上ノ倉山、尾瀬・咲倉沢左岸尾根～笠ヶ岳、巻機山
～柄沢山～大烏帽子山～ナルミズ沢山スキー、白毛門・松の木沢の頭、上越・板幽沢
左岸尾根～雨ヶ立山、越後？浅草岳ヤデマナ沢左岸尾根、春山合宿・奥根権俣川源
流部ほか

◎まほろば NO.16 2005.6 B5 26P まほろば山岳会

北ア・乗鞍岳山スキー、奥秩父・一之瀬～雁峠、奥多摩・小川谷滝谷右俣～酉谷山、
南会津・伊南川滝倉沢川金山沢左俣～古町丸山～塩ノ岐川三の沢、山菜山行・南会津
滝倉川周辺、三ヶ峠、さいたま市岳連救助訓練ほか

◎まほろば NO.17 2005.7 B5 12P まほろば山岳会

市民ハイキング・乗鞍岳、奥根・権俣川洗ノ沢本流～笠ヶ岳、奥秩父・大洞川和名
倉沢～和名倉山ほか

◎まほろば NO.18 2005.8 B5 30P まほろば山岳会

春の集中・赤安田代、奥根・ナルミズ沢～大烏帽子山～朝日岳～白毛門、奥秩父・
滝川本流～水晶谷～豆焼沢、川内・杉川本流～アカシガラ沢出合、北ア・黒部川樺平
周辺、南会津・袖沢南沢出合、南ア・樺島～倉沢～策ヶ岳ほか

◎わらじ NO.587 2005.2 B5 14P わらじの仲間

雪崩講習会、谷川・北沢左岸尾根～七ツ小屋山、奥武蔵・関八州見晴台ほか

◎わらじ NO.588 2005.3 B5 20P わらじの仲間

南ア・常念岳～一の沢スキー、川内・室谷～太郎山東尾根、戸隠・九頭竜山東稜～大
洞沢左稜の左、二岐山スキー、蔵王・後烏帽子岳と不忘山スキーほか

◎わらじ NO.589 2005.4 B5 32P わらじの仲間

海谷・駒ヶ岳・冬の集中、八ヶ岳・権現岳東稜、男鹿山塊・白倉山～三依山、高湯ス
キー場～吾妻小屋～東吾妻山～高山～土湯、川内・釜ノ罫～悪場峠～青里岳～矢筈岳
～魚止山～室谷、北ア・鹿島槍ヶ岳～十字峽～別山トサカ尾根～源治郎尾根～劔岳ほ
か

◎わらじ NO.590 2005.5 B5 12P わらじの仲間

北ア・鹿島槍ヶ岳ダイレクト尾根～鎌尾根ほか

◎わらじ NO.591 2005.6 B5 32P わらじの仲間

北ア・白馬鍵ヶ岳北稜、北ア・室堂～五色ヶ原～薬師岳～黒部五郎岳～槍ヶ岳～上高

地、朝日・大鳥池～化穴山～以東岳～障子ヶ岳～大井沢、上越・銅倉尾根～下津川山
～巻機山～茂倉岳～谷川岳、南会津・城郭朝日山～山毛櫨沢山、越後・蛇崩沢右岸尾
根～ネコブ山～上銅倉沢～上シンデン沢右岸尾根～小穂口ノ頭～本谷山～越後沢左俣
～平ヶ岳～景鶴山～ケイズル沢～鳩待峠～戸倉ほか

◎わらじ NO. 592 2005. 7 B5 20P わらじの仲間

春の集中総括・会越・フキ平、西丹沢・玄倉川ザンザ洞二の沢～本谷、会越・叶津皮
～赤崩～赤崩峠～真奈川、奥秩父・大常木谷～竜喰谷ほか

◎わらじ NO. 593 2005. 8 B5 12P わらじの仲間

安達太良・杉田川～石筵川、奥秩父・瑞牆山フリー、会越・只見川小戸沢東ノ沢～会
津朝日だけ、飯豊・内の倉川石ミキ沢ほか

◎わらじ NO. 594 2005. 9 B5 20P わらじの仲間

飯豊・飯豊川ウジノ沢～焼峰山、内の倉川皆口沢～西ノ峰、白毛門、飯豊・胎内川檜
ノ木沢鴨沢～二王子岳、奥秩父・竜喰谷、上越・毛渡沢シッケイ沢中俣～仙ノ倉谷イ
イ沢、谷川・ナルミズ沢ほか

◎さわぐるみ NO. 25 2004. 12-2005. 1 A4 8P グループ沢胡桃

妙義・入山川北鳥帽子沢、丹沢・早戸川本間沢、円山木沢、中川川悪沢～沖箱根屋沢、
水無川モミソ沢～四十八瀬川小草平沢、東吾野岩トレ、八ヶ岳・ジョウゴ沢、湯河原
幕岩ほか

◎さわぐるみ NO. 26 2005. 2. 3 A4 16P グループ沢胡桃

奥多摩・日原川小川谷犬麦谷、湯河原幕岩、尾瀬・戸倉～アヤマ平、上越・土樽周辺
レスキュー訓練、岩鞍スキー場～西山、八幡平スキーほか

◎さわぐるみ NO. 27 2005. 4. 5 A4 20P グループ沢胡桃

南会津・会津駒ヶ岳スキー、湯河原幕岩、八幡平・葛根田川右岸スキー、丹沢・谷太
郎川鳥屋待沢、湯河原幕岩レスキュー訓練、上越・神楽ヶ峰スキー、尾瀬・タソガレ
田代～皿伏せ山スキーほか

◎さわぐるみ NO. 28 2005. 6 A4 18P グループ沢胡桃

丹沢・早戸川原小屋沢、奥秩父・丹波川火打石谷、丹沢・葛葉川～藤熊沢、春合宿・
南紀、氷川屏風岩、山菜大源太周辺、奥秩父・笛吹川鶏冠谷左俣本谷、大洞川井戸沢
奥新エ門沢右俣～惣小屋沢芋ノ窪ほか

◎さわぐるみ NO. 29 2005. 7 A4 24P グループ沢胡桃

大菩薩・泉水谷小室川谷、足尾・湯ノ沢ナメ沢、丹沢・小川谷廊下、奥秩父・和名倉

沢、尾瀬・片品川羽根沢大薙沢、御坂・大幡川四十八滝沢、八幡平・玉川大深沢関東
沢、ヤセノ沢、那須・苦戸川大沢左俣～峠沢ほか

◎さわぐるみ NO.30 2005.8 A4 24P グループ沢胡桃

徒渉訓練・奥秩父滝川本流、谷川・阿能川右俣、奥秩父・ヌク沢左俣右沢、和賀・生
保内川～朝日沢、高下川～和賀川～大鷲倉沢、中ア・正沢川細尾沢、奥利根・小檜俣
川洗ノ沢ほか

◎さわぐるみ NO.31 2005.9 A4 36P グループ沢胡桃

魚野川・南カドナミ沢、丹沢・中津川キューハ沢～クモガフチ沢、谷川・ヒツゴー沢、
湯檜曾川マチガ沢本谷、高倉沢左俣、奥秩父・鶏冠谷左俣、北ア・金木戸川小倉谷、
夏合宿・奥利根、谷川・赤谷川本谷、那須・苦土川井戸沢、越後・水無川デトノオオ
ナデ沢ほか

◎Next! NO.109 2005.1 B5 12P 山岳溪流釣り集団むげん

奥多摩・ツヅラ岩ほか

◎Next! NO.110 2005.2 B5 12P 山岳溪流釣り集団むげん

仲間の近況報告ほか

◎Next! NO.111 2005.3 B5 10P 山岳溪流釣り集団むげん

和賀・生保内川ほか

◎Next! NO.112 2005.4 B5 12P 山岳溪流釣り集団むげん

丹沢・原小屋沢ほか

◎Next! NO.113 2005.5 B5 14P 山岳溪流釣り集団むげん

丹沢・早戸川、奥秩父・滝川ほか

◎Next! NO.114 2005.6 B5 14P 山岳溪流釣り集団むげん

川内・中杉川ほか

◎Next! NO.115 2005.7 B5 10P 山岳溪流釣り集団むげん

焼石沼ほか

◎Next! NO.116 2005.8 B5 24P 山岳溪流釣り集団むげん

奥会津・白戸川メルガ股沢、黒部・東沢、奥秩父・笛吹川東沢西ノナメ沢ほか

◎とまのかぜ NO.146 2005.1 B5 16P 童人トマの風

北ア・遠見尾根～大遠見山、餓鬼岳、八ヶ岳・春日ルンゼ、谷川・茂倉岳～谷川岳、
中ア・檜尾岳～千畳敷、八ヶ岳・広河原沢3ルンゼほか

◎とまのかぜ NO.147 2005.2 B5 56P 童人トマの風

越後・大割山～三石山～巻機山、北ア・燕岳～常念岳～徳本峠～霞沢岳、竹村新道～水晶岳、北海道・原始ヶ原～富良野岳、前富良野岳、南ア・戸台の氷瀑、南会津・大戸岳、中ア・檜尾岳～千畳敷、越後・金城山高棚川左岸尾根、南ア・鋸岳、八ヶ岳・阿弥陀岳北稜、石尊稜、日光白根山、頸城・小谷温泉～金山、二口・面白山スキー、南会津・神籠ヶ岳山スキー、頸城・佐渡山、黒姫山、上信・湯ノ丸山、八ヶ岳・地獄谷上ノ権現沢アイス、南ア・尾白川黄蓮谷左俣アイス、南ア・篠沢七丈瀑アイス、西上州・霧積温泉アイス、南佐久・湯川アイス、西上州・相沢、御場山西ルンゼアイスほか

◎とまのかぜ NO.148 2005.3 B5 55P 童人トマの風

八ヶ岳会山行9ルート、日光雲竜瀑、頸城・小谷温泉～天狗原山、南ア・荒川出合アイス、南ア・布引山、葡萄山塊・葡萄山、新保岳、越後・金城山、豊田・南山岩トレ、西上州・氷瀑、志賀・竜王越スキー、妙高・前山テレマーク、奥美濃・野伏ヶ岳、中ア・広河原～恵那山、ニュージーランド・マックレオドストリーム遡行～ロングバリーストリームほか

◎とまのかぜ NO.149 2005.4 B5 68P 童人トマの風

頸城会山行・焼山北面6パーティ、南会津・会津駒ヶ岳スキー、蔵王・不忘山、舟形・後白髪山スキー、八ヶ岳・旭岳東稜、北ア・十石山スキー、焼岳下掘沢スキー、南会津・大博多山、白神山地西部、城山フリー、越後・三ッ石尾根～巻機山、下田川内・杉川～矢筈岳、谷川・飯士山鋸尾根、焼石・焼石岳スキー、頸城・火打山澄川～容稚山、北桑沢、巻機山米子沢スキー、谷川・仙ノ倉山北尾根～イイ沢スキー、奥多摩・白妙橋フリー、北ア・摩利支天岳、大雪・チトカニウシ山、海別岳、三段山、ニセコアンヌプリ、イワオヌプリ、無意根山、谷川・クロガネノ頭中尾根ほか

◎とまのかぜ NO.150 2005.5 B5 42P 童人トマの風

越後・守門岳スキー、八ヶ岳・赤岳主稜、阿弥陀岳北稜、北ア・蓮華温泉～雪倉岳スキー、南会津・三岩岳スキー、会津・大戸沢岳北東尾根～中ノ沢スキー、頸城・小谷温泉～大渚山、雨飾山南尾根、巻機山・ブサの裏沢～ノミオ沢、南会津・会津駒ヶ岳スキー、蔵王・屏風岳～後烏帽子岳、鳥海山スキー、月山スキー、湯殿山スキー、北ア・焼岳、越後・滝ハナ沢左岸尾根～越後駒ヶ岳～白沢スキー、荒沢岳蛇子沢中俣～左俣スキー、秩父・十石峠フリー、佐久・湯川フリー、北ア・鹿島槍ヶ岳天狗尾根、八方尾根ガラガラ沢、明神岳東稜、白馬岳主稜、妙高・三田原山、頸城・天狗原山スキーほか

◎とまのかぜ NO. 151 2005. 6 B5 64P 童人トマの風

頸城・放山～空沢山、鳥海山スキー、北ア・白馬主稜～鱒沢スキー、奥利根・鳩待峠～平ヶ岳～剣ヶ倉山～歩き尾根～越後沢尾根～丹後山～越後駒ヶ岳、朝日・天狗小屋～竜門小屋周辺スキー、頸城・妙高山、毛猛・未丈ヶ岳～毛猛山～浅草岳、北ア・黒部源流スキー、鳥海山・白雪川左岸台地スキー、飯豊・北股岳スキー、北ア・北鎌尾根～奥穂高～西穂高、二口・名取川大行沢、北ア・白馬主稜、鹿島槍ヶ岳東尾根、月山、奥秩父・中津川小品沢、須金・保呂内沢～沼沢沼、月山スキー、小川山・南稜レモン、北ア・針ノ木峠スキー、奥秩父・大皿川ワレイワ谷ほか

◎とまのかぜ NO. 152 2005. 7 B5 46P 童人トマの風

那須・阿武隈川南沢、舟形・広瀬川大綱鳥沢～小綱鳥沢、谷川・一ノ倉沢南稜、薄根川荒山沢中ツ沢、南会津・桧枝岐川保太沢、上信越・会山行7パーティ、男鹿・大蛇尾川西俣～東俣、南秋川・遭対訓練ほか

◎とまのかぜ NO. 153 2005. 8 B5 30P 童人トマの風

奥多摩・神戸川クドレ沢左俣中岩沢、会越・室谷川本流、谷川・小出俣川マチホド沢、大峰・芦廻瀬川本流、尾瀬・中ノ岐沢小淵沢、花巻・豊沢川出羽沢松倉沢、吾妻・中津川本流、川内・中杉川ホリンド沢、中ア・片桐松川、大雪・旭岳～黒岳、越後・ギロト沢B沢前スラブ、尾瀬・片品川センノ沢左俣～右俣、丹沢・玄倉川小川谷廊下ほか

◎とまのかぜ NO. 154 2005. 9 B5 60P 童人トマの風

飯豊・内ノ倉川四十八沢右俣～師走沢、内ノ倉川焼峰沢～赤倉岐沢、川内・早出川中杉川、花巻・寒沢川西又沢、北ア・金木戸川打込谷、飯豊・胎内川檜ノ木沢堂沢、谷川・大源太川鷺ノ首沢、虎毛・皆瀬川春川本谷～虎毛沢、東北・生保内川～部名垂沢、御嶽山・濁河川兵衛谷～シン谷、北海道・日高・サッシビチャリ川南面直登沢～キムクシュベツ沢、コイボクシュメナシュンベツ川、丹沢・大山川右俣、小川谷、南ア・野呂川シレイ沢、谷川・湯檜曾川東黒沢～ウツボギ沢、南ア・黒桂河内二の右俣～保利沢、剣岳、川内下田・笠掘川砥沢川～小又川西又沢ほか

◎すずらん通信 NO. 286 2005. 1 B5 11P 鈴蘭山の会

北ア・剣岳八峰VI峰Cフェース～北方稜線、八甲田・酸ヶ湯スキーほか

◎すずらん通信 NO. 287 2005. 2 B5 12P 鈴蘭山の会

谷川岳西黒尾根、サエラスキー場スキートレ、北ア・小遠見山ほか

◎すずらん通信 NO. 288 2005. 3 B5 12P 鈴蘭山の会

上州武尊山雪上訓練、霧積温泉アイス、鍋倉山、五地藏山、黒姫山、小野岳、二岐山
ほか

◎すずらん通信 NO. 289 2005. 4 B5 10P 鈴蘭山の会

上越・かぐら・雁ヶ峰ほか

◎すずらん通信 NO. 290 2005. 5 B5 11P 鈴蘭山の会

未丈ヶ岳、頸城・火打山～澄川～容稚山～大毛無山～北桑沢、北ア・室堂～五色ヶ原
～太郎平～双六岳～槍ヶ岳～上高地ほか

◎すずらん通信 NO. 291 2005. 6 B5 4P 鈴蘭山の会

奥多摩・雲取谷、丹沢・三角ノ沢ほか

◎すずらん通信 NO. 292 2005. 7 B5 4P 鈴蘭山の会

会務報告ほか

◎すずらん通信 NO. 293 2005. 8 B5 10P 鈴蘭山の会

丹沢・セドの沢左俣、大洞川荒沢谷、朝日・朝日鉱泉～鳥原山～大朝日岳～竜門岳～
以東岳～大鳥、南ア・釜無川石空川北沢、奥多摩・水根沢ほか

◎すずらん通信 NO. 294 2005. 9 B5 10P 鈴蘭山の会

北ア・双六谷、南ア・大井川赤石沢、奥秩父・笛吹川東沢釜の沢東俣、葛根田川関東
沢ほか

◎逍遙 NO. 1 2005. 3 B5 20P 逍遙溪稜会

奥武蔵・日和田山、丹沢・水無川ヒゴノ沢、大山川右俣、水無川源次郎沢～流れの沢、
大月・九鬼山、奥武蔵・天覧山、丹沢・皆瀬川谷戸入沢、水無川本谷、奥武蔵・日和田
岩、丹沢・尺里川観音沢～大岩沢、日和田岩、丹沢・前大沢ほか

◎逍遙 NO. 2 2005. 6 B5 31P 逍遙溪稜会

丹沢・皆瀬川、水無川新茅ノ沢、モミソ沢～ソグラ沢、中川川西沢下棚沢、河内川滝
口沢、谷太郎川大小屋ノ沢、奥多摩・唐松谷、裏妙義・中木川深沢、奥多摩・盆掘川
石津窪、丹沢・玄倉川女郎小屋沢、奥多摩・日原川倉沢長尾谷、北秋川シンナソー～
ヒヤマゴ沢、神戸川水ノ戸沢、丹沢・中川川モロクボ沢、世附川悪沢クマ沢～大又沢
笹子沢、奥多摩・入川谷～川乗谷逆川右俣～大ダワ沢、丹沢・早戸川円山木沢～本間
沢、奥秩父・笛吹川赤ノ浦川滝ノ沢、西沢行者谷～滝川古礼沢、東沢鶏冠谷右俣ほか

会報

◎ADVENTURE forum NO. 17 2005. 2 A4 8P 植村記念財団

地球に挑戦 (C/Wニコル) ほか

◎ADVENTURE forum NO.18 2005.7 A4 8P 植村記念財団

地球に挑戦 (小山田大) ほか

◎年報すずらん 25号 2004.11 B5 115P 鈴蘭山の会

山スキーの記録・八幡平、天元台、梵天岳、浅間山、富士山、仙ノ倉山、黒部源流、爺ヶ岳、白馬岳、昼闇山、焼山など10本。沢登りフリーなどの記録・朝日周辺の沢、ナルミズ沢、湯檜曽川抱返り沢、八幡平、葛根田川、頼母木川足ノ松沢、荒川東俣沢、左俣、有笠山、キュウハ沢、白毛門沢、大源太川鷺ノ首沢、荒沢山ダイレクトスラブ、小出俣沢マチホド沢、雪上訓練、中ノ俣川灰ノ又沢、清津川釜川本流、野呂川扇沢、北岳バットレス、開聞岳など19本ほか

◎岳人になるための本 2005.1 B5 まつど岳人倶楽部 (柏瀬祐之さんからの寄贈)

はっきり言って単一山岳会でこれだけの本を編集出版したことに驚く。担当者の苦労と意気込みがうかがえる。技術書である。岩登り、沢登り、冬期クライミング、アイスクライミング、一般技術、救助技術、緊急時対応の7章に分かれている。その他、登攀小史として、時代を超えて語り継ぎたい岳人たち20名が紹介されている。

◎山の歌 2005.1 B6 まつど岳人倶楽部

今は歌う機会が少なくなった山の歌の歌集

以上閲覧したい方は本図まで

編集後記

ようやく56、57号を発行することができました。編集者の不手際で発行が遅くなり大変申し訳ありません。前号での反省をふまえてちょっとは見やすくなったかと思っているのですが、違いはわかるでしょうか。次号はさらにステップアップしたものにしたいと思います。

こうして山行実績をみていてつくづく思うことは「全然山に行けてないな」ということです。仕事のこと、家のこと、目の前に片付けなくちゃいけない積み木が増えたのは事実ですが、山に行けてない分ストレスが増える自分がいることも事実です。二兎を追う者は一兎をも得ずともいいますが、うまくバランスをとって三兎を手にいれたいものですね。

(S子)



季報[R&V]第56、57号 発行 2006年夏

発行人：本図一統

発行所：ACCJ-茨城

編集者：本図一統、渡辺聡子

印刷所：やさし印刷





岩壁、沢、冬山のクライミング集団